

養育態度が自己感情に及ぼす効果

—成功・失敗体験を通して—

Effect of Parental Attitudes Toward Child Rearing on Self-Feelings

: Focusing on Successful / Unsuccessful Experiences

児童学研究科 児童学専攻 1000-080612 菊池佳子

問題と目的

内閣府（2009）によると、平成 19 年度の中途退学理由は、学校生活・学業不適応が最も多く見られ、他に、もともと高校生活に熱意がない、授業に興味がないという理由も挙げられている。高田（2004）は、昨今の高校生は学力レベルに関係なく、「やる気」と「自信」が低下している傾向が見られ、自尊心を育む必要があるとしている。園田（2004）によると、自尊感情は学力形成に大きく関係し、保護者などの重要な他者の存在によって子どもの自尊感情が育まれるとしている。

親から愛されていたり、自立を尊重されていたりすると自尊感情が高まる（多田・蛸崎・石井,2007：伊藤,2001：新井,2004）。子どもに対して親が懲罰的な関わりをしたり、親から様々な場面でよいこでいなければならぬという願望を受けたと感じていたりすると自尊感情が低い傾向を示し（市毛・大河原,2001：佐藤,2007）、親の接し方によって、子どもの自尊感情に影響することが示唆されている。

近年では自尊感情を再検討する研究もおこなわれており、大学生の主体的な自己形成には、自尊感情の高低だけに焦点を当てるのではなく、自己感情である本来感と自己価値の随伴性に注目する必要があるということが示唆されている（伊藤・小玉,2005：2006）。本来感とは「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」である。自己価値の随伴性とは、自己価値の感覚が何らかの外的な基準上での査定に依存しており、その基準上で高いパフォーマンスを達成すること（e.g.テストで100点をとる）で得られる随伴性自尊感情から発生したものである。自己感情は、それが自己への評価的感情であるということから、一般的には「自尊感情」として扱われる場合が多い（溝上,2003）。本研究では伊藤・小玉（2005、2006）の研究の通り、本来感と自己価値の随伴性を自己感情とする。

学校環境も自尊感情に影響することを示しており、学習面と部活動面の影響が明らかにされている（松岡・押澤,2001：瀧野・斉藤,1991：高田・丹野・高田,1985：）。

尾崎・上野（2001）は学業領域とスポーツ領域に焦点を当て、過去に目標達成が成功で

きていれば現在や未来にプラスの影響があり、逆に失敗していれば、現在や未来にマイナスの影響があると認知されるという傾向を明らかにしている。瀧野・斉藤（1991）と高田他（1985）の研究から試験の成績などが向上した、部活動を肯定的にとらえ部活動をやり遂げた、ということを経験として、成績が下がった、部活動に対して否定的な捉え方をして達成欲求が満たされなかったということを経験と見ることができると考える。尾崎・上野（2001）、瀧野・斉藤（1991）、高田他（1985）の研究から、自尊感情は成功・失敗経験と関連があると予想される。

高田（2007）は、やる気や自信は小さな成功経験や他者からの役割期待に応えることなどによって獲得されるとしている。筆者は、養育態度以外にも、成功・失敗経験が自己感情すなわち自尊感情に影響するのではないかと考える。

本研究の目的は、子どもからみた親の養育態度と成功・失敗経験が自己感情に影響しているかを検討する。どのような養育態度が自己感情の本来感と自己価値の随伴性に影響しているのかを明らかにし、養育態度の高低群と成功・失敗経験の高低群が自己感情へ及ぼす影響を検討する。

尾崎・上野（2001）と上野・尾崎（2008）の研究では成功経験としているが、自己効力感に影響する遂行行動の達成すなわち成功経験の意味も含むため、本研究では成功・失敗経験と表記する（Bandura,1977;内田・森,2004）。

研究1 予備調査 成功・失敗経験尺度の作成

目的

成功経験の質問紙を作成するため、成功経験をするものの一つとして部活動での経験について大学生を対象に自由記述で回答を求めた。

方法

Y県の公立大学の学生132名（男子38名、女子94名、平均年齢20歳）を調査対象者とし、2009年7月に、無記名の自由記述式の質問紙を講義終了後の休み時間中に配布し、その場で回収した。質問紙の内容は、中学時代に部活動を行っていたかということと、部活動での経験について自由記述で回答求めた。

結果と考察

部活動を通して忍耐力や集中力などの精神的強さ、知識や経験、人間関係に関する学び、自己の内面に関する向上が得られるということがわかった。部活動をすることで成功経験

も得られることが明らかになった。松岡・押澤（2001）の研究では、中学生の自尊感情を規定する要因について、運動部に参加している生徒の自尊感情が高いことが明らかとなり、自尊感情を規定する一つとして示されている。松岡・押澤（2001）の研究と今回の予備調査の結果から、部活動で得られた成功体験も自己感情に影響するのではないかと筆者は考える。

試合で勝てたこと、技術が向上したなど予備調査から得た目標達成に関する回答と既存の尺度を交えて、部活動面についての成功・失敗体験尺度を作成する。学習面の尺度に関しては、既存の尺度を参考にして成功・失敗体験尺度を作成する。

研究2 本調査 養育態度が自己感情に及ぼす効果—成功・失敗体験を通して—

目的

子どもからみた親の養育態度と成功・失敗体験が自己感情に影響しているか、どのような養育態度が自己感情の本来感と自己価値の随伴性に影響しているのかを明らかにし、養育態度の高低群と成功・失敗体験の高低群が自己感情へ及ぼす影響を検討する。

方法

T県・I県・O県の高校1年生と2年生、436名（男子254名、女子182名、平均年齢 $16.20 \pm .67$ 歳）を調査対象とした。なお、中学時代に部活動をしていた人数は385名（文化部84名、運動部301名）、行っていなかった人数は51名であった。2009年11月下旬から12月上旬に、無記名の個別記入形式の質問紙で、放課後または授業開始前の休み時間に約10分かけて実施した。質問紙は、子どもが感じている親の養育態度を測るPBI尺度（井上・大井・西村・井森・斉藤：2006）、中学校時代の学習面と部活動面での成功・失敗体験を測る成功・失敗体験尺度（自作）、伊藤・小玉（2005,2006）が作成した、本来感尺度と自己価値の随伴性尺度を混合した自己感情尺度を使用した。

結果

尺度の構成と検討

PBI尺度（井上・大井・西村・井森・斉藤：2006）は、本研究では因子分析を行わず、先行研究の因子をそのまま分析した。「情愛」「依存期待」「決定尊重」の3つの因子で構成されている。下位尺度別にCronbachの α 係数を算出したところ、「情愛」 $d=.84$ 「依存期待」 $a=.85$ 「決定尊重」 $\alpha=.76$ であり、十分な信頼性が得られた。

自作である成功・失敗体験尺度の15項目に対して最尤法・プロマックス回転による因

因子分析を行った。第Ⅰ因子は「部活達成」第Ⅱ因子は「学習達成」と命名した。内的整合性を検討するために各下位尺度の Cronbach の α 係数を算出した。「部活達成」 $\alpha = .94$ 「学習達成」 $\alpha = .91$ であり、高い信頼性が得られた。

自己感情尺度（伊藤・小玉,2005・2006）は、本研究で因子分析は行わず、先行研究をそのまま分析した。下位尺度別に Cronbach の α 係数を算出したところ、「本来感」 $\alpha = .78$ 「自己価値の随伴性」 $\alpha = .82$ であり、十分な信頼性が得られた。

養育態度が成功・失敗体験に与える影響

PBI 尺度を独立変数、成功・失敗体験を従属変数とし、重回帰分析を実施した。「情愛」因子は「部活達成」に正の相関を示し、「学習達成」には正の相関を示した。「依存期待」因子は「部活達成」に負の相関の結びつきが見られた。

養育態度が自己感情に与える影響

PBI 尺度を独立変数、自己感情を従属変数として重回帰分析を行った。「情愛」因子は「本来感」と「自己価値の随伴性」に対して正の相関があり、「依存期待」因子は「自己価値の随伴性」に対して正の相関を示した。「決定尊重」因子も「本来感」と「自己価値の随伴性」に正の相関が見られた。

成功・失敗体験と自己感情の関連

成功・失敗体験と自己感情について相関係数を算出し、部活達成・学習達成共に本来感と自己価値の随伴性に関連が見られた。相関係数の値を比較したところ、部活達成は自己価値の随伴性より本来感が高くなっていた。学習達成は本来感より自己価値の随伴性の値が高くなっていた。部活達成はより本来感と関連があり、学習達成はより自己価値の随伴性との関連があるということが示唆される。

養育態度の高低群と成功・失敗体験の高低群が自己感情へ及ぼす影響

高低群に分けた PBI 尺度と高低群に分けた成功・失敗体験の因子を合わせ、『情愛因子高低群・部活達成因子高低群』『情愛因子高低群・学習達成因子高低群』『依存期待因子高低群・部活達成因子高低群』『依存期待因子高低群・学習達成因子高低群』『決定尊重因子高低群・部活達成因子高低群』『決定尊重因子高低群・学習達成因子高低群』を作成した。上記の各群を独立変数とし、自己感情を従属変数とする一要因分散分析を行った。その結果、各群と自己感情に有意差が見られ、養育態度と成功体験は自己感情に関連があることが確認された。

考察

今回の検討から、養育態度が自己感情及び成功・失敗体験に影響を与えていた。自己感情と成功・失敗体験との間に正の相関が見られた。養育態度と成功・失敗体験の高低群が自己感情に関連している事も明らかになった。多重比較を行った結果、子どもが親から愛情を受けてきたと感じている情愛が強く、成功体験が多いほど、本来感を高く得ると同時に、自己価値の随伴性も高く得ていた。情愛だけではなく、子どもは親が自分の決定を尊重してくれたという決定尊重にも自己価値の随伴性との関連が見られた。自己価値の随伴性は外的な基準によって自尊感情を獲得するが、必ずしも外的な基準による査定が新たな活動や視点に価値を見出しにくくなるだけではないと、伊藤・小玉（2006）が示したように、自己をよりよくするために外的基準を内在化させ、社会適応のために必要である事が示された。部活動面や学習面での成功体験が自己価値の随伴性に影響していることも明らかになった。このことは、目標の達成を目指すことや、試合に勝つこと、成績が良くなるなど、外的基準による査定であったためであると考えられる。本来感に関しては、親の子どもに依存してほしいという依存期待との関連は見られなかったが、情愛、決定尊重、部活動・学習面での成功体験には正の相関を示した。

養育態度の情愛・決定尊重と成功体験が、自己感情の本来感のみに関連するだけではなく、自己感情の自己価値の随伴性にも関連していることが明らかになった。

子どもから見た親の養育態度と成功・失敗体験については、子どもが親に愛されていると感じることが成功体験に作用していた。今回の研究結果から、養育態度が自己感情に影響を与えることが明らかとなったが、成功体験も自己感情に影響を与えるということが示された。成功体験は自尊感情を育む要因の一つであることも示唆された。高校生のやる気と自信が低下している問題に関して、高田（2002）は成功体験を取り入れることを提案している。養育態度だけではなく、成功体験も自己感情に影響することが確かめられたことで、成功体験をすることの重要性がさらに明らかになった。高校生の中途退学問題の中にもともと高校生活に熱意がない、授業に興味がないという理由が挙げられていたが、成功体験をすることでこの問題を緩和することはできないだろうか。

自己感情すなわち自尊感情を促進する、成功体験という新たな要因を示すことができた。